鎌ケ谷の文化財

鎌ケ谷市教育委員会

①下総小金中野牧跡（捕込）《国史跡》 日
東中沢2-1

江戸幕府は、軍馬を確保するため下総地方に小金牧・佐倉牧を設置した。市域の台地上は小金牧のうちの中野牧に属した。牧内には馬を管理する施設として「捕込」や「野馬土手」などが造られ、小金牧全体で最盛期には1,000頭もの野馬が野放し飼いにされていた。

捕込は、野馬を追い込み捕らえて、軍馬として養成する馬と払い下げする馬とにより分ける、3区画から成る施設であった。

野馬を捕込へと追い込む「野馬捕り」は、牧を管理する「牧士」の指揮により、周辺の村から集められた農民（勢子）が行った。その様子は、勇壮であったようで、江戸時代の旅行ガイドブックにあたる「成田名所図会」では、隣の「下野牧の野馬捕り」が紹介され、江戸からも多くの見物人が集まったようである。なお、野馬の払い下げ金は少ないながら、幕府の安定した収入であった。

江戸幕府の軍馬生産を知る上で重要であり、かつ小金牧として唯一現存する捕込として貴重であるため、平成19年2月6日、国史跡に指定された。

②中沢貝塚 日
東中沢2-10他

貝柄山公園西側の台地上にある直径約130mの馬踏形貝塚で市内では最大、県内でも規模・内容とも有数の貝塚である。これまでに多数の住居跡と大量の土器、石器とともに土偶・石棒をはじめとする特殊な遺物も数多く出土している。貝層からは動物の骨も多数発見されており、狩りや海資源の採取が行われていたことがわかる。

遺跡が形成されたのは、縄文時代後期（4千～3千年前）を中心に中～後期（約5千～2千3百年前）と推測される。

③大堀込遺跡 日
中沢1123他

市立第四中学校を囲むように広がる遺跡。双貝辺田No.1遺跡に連なる台地上に形成された集落跡で住居跡や高床式建物跡、貯蔵穴などが確認された。縄文土器、土師器、須恵器なども発見されている。縄文、古墳、奈良・平安の各時代にわたる複合遺跡である。縄文時代中期の土偶も発見されている。

④根郷貝塚 ⌂
中沢477他

万福寺の北側に位置する遺跡である。集落跡と貯蔵穴群・墓跡・貝塚など各種の遺構が確認された。縄文時代の住居跡のうち、1棟から6体の人骨が出土している両屋墓も見つかっている。遺跡の形成された時期は縄文、古墳、奈良、平安、室町の5時代におよび、各時代の土器、石器や動物の骨の他、中世の板碑も見つかっている。

住居跡から人骨が出土した状況。
このうち1体は保存処理が施されて郷土資料館で展示している。

⑤万福寺境内遺跡 日
中沢484（万福寺境内）

152基以上の板碑と火葬人骨・骨壷・永楽銭などが出土した県内でも貴重な中世遺跡である。弘安7年（1284）の板碑が最古。梵字を刻んだ種子板碑と「南無妙法蓮華経」を刻んだ題目板碑とがあり、浄土教系の信仰から日蓮宗への改宗があったことがわかる。

⑥題目庚申道標
中沢197

中沢字新橋の路傍にある。享和3年（1803）に建てられ、「南無妙法蓮華経」と髭文字が刻まれている。庚申塔と道標も兼ね、「か祢が崎（金ケ作）　船ばし（橋）　行とく（徳）」と刻まれているが、元に建てられていた位置と変わっていることがわかる。

⑦庚申塔群
栗野208（八坂神社境内）

栗野は江戸時代前期から現代まで庚申講が続いている市内で唯一の地区である。造立された庚申塔の中では元禄12年（1699）が最も古い。安政2年（1855）以降は5年目ごとに規則正しく現在まで建てられている。

⑧栗野の石塔群
栗野208（八坂神社境内）他

元は字西側と字東側の市道を挟んで並んでいたが、西側の出羽三山講碑8基と歯欠如来像・待道権現碑・聖徳太子講碑は、道路拡幅に伴い、八坂神社境内へ移設された。東側には地蔵を挟んで、14基の馬頭観音碑が今も残る。その中の安永8年（1779）のものは市内最古である。

⑨手洗跡・鈴・「豊作社」額・大絵馬《市指文》 日
初富221-1（豊作稲荷神社境内）

豊作稲荷神社は、開墾地初富の農作物の豊穣を願って明治6年（1873）に建立された。ここには指定文化財が4点ある。手洗跡は初富の開墾事業を担当した東京の豪商高浅氏が奉納したもの。鈴・「豊作社」額もこの年に作られ奉納されたものである。大絵馬（郷土資料館に展示）には当時行われていた賽垂の様子が描かれている。

⑩土地紀念講碑《市指文》 日
北初富6-1（光圓寺境内）

初富開墾は明治2年（1869）から始まった。しかし、作物の不作が重なったため、多数の離散者が出たり、開墾会社との間で土地騒動が起こるなど困難をきわめたものであった。その後、苦しい中で徐々に開墾を成功させていった。その子孫が祖先をしのび、励まし合ったのが土地紀念講である。この碑は開墾50周年を記念して、大正7年（1918）に光圓寺境内に建てられたものである。

⑪八幡・春日神社の森《市指文》 日
中沢907

もともとスギとクロマツの人工林から始まり、約200～300年を経過しているものと思われる。幹周り3m以上の巨木は、スギが2本、ムクノキが6本ある。また、国帯林特有のヤブツバキが亜高木として森をおおい、12月初旬ころから花が咲き始める。

⑫三橋家の墓地《市指文》 日
中沢646

三橋家は、江戸時代に小金中野・下野牧の牧士役をつとめた家柄である。この墓地には享保8年（1723）にくなった五郎兵衛から、昭和の初めに貴族院議員として活躍した三橋貫まで10代にわたる墓石がある。

⑬妙蓮寺板碑及び五輪塔《市指文》
東道野辺1（妙蓮寺）

道野辺は日蓮の母、妙蓮の生まれたところと伝えられている。また、妙蓮寺は中山法華経寺の末寺の古い寺である。妙蓮寺板碑は永享4年（1432）に造られたもので、「右為妙蓮逆修也」と刻まれている。五輪塔も現存している。

⑭根郷神社の森《市指文》 日
道野辺50他

スギ・ヒノキ・アカガシ・コブシなどの本殿林と、それを囲むスギ・ヒノキの人工林で構成されている。また、幹周り3.48mのスダジイの巨木もある。スギの樹齢は100±10年と推定される。

⑮馬頭観音
道野辺35他

近代以前、馬は重要な労働力であって、大切に扱われていた。道野辺字下西山の墓地には馬頭観音が3基現存している。これらのうち、明治43年（1910）造立のものは日露戦争で徴発されて死んだ馬の供養のためである。

⑯高礼「慶応四年太政官布告」《市指文》
中央1-8-31他（郷土資料館他）

慶応4年（1868）、明治政府は「五箇条の御誓文」を発布した。一方庶民に対して「五傍の掲示」を出し、江戸時代と同様に、一揆やキリスト教を禁止した。この高札は、道野辺の妙蓮寺わきの路傍に立てられたといわれている。

⑰下総牧御鷹場知事北島秀朝等旅宿看板《市指文》
中央1-8-31（郷土資料館）

下総牧の鷹狩事業が始まる直前の明治2年（1869）、東京府開墾局知事北島秀朝ら開墾局の役人たちが、当時栗野村の名主をつとめていた流谷家に宿泊し、開墾予定地を視察した。そして豊かな土地になるようにとの願いを込めて「初富」と命名・宣言したことを裏付ける資料である。

⑱北方前板碑《市指文》 日
中央1-8-31（教育委員会寄託資料）

板碑は石製の供養塔で、埼玉県北西部で採掘された緑泥片岩を用いた武蔵型板碑が多い。北方前板碑は元徳3年（1331）を最古に35基の板碑がある。すべて阿弥陀如来を表わす梵字𑖀（キリーク）を刻んだ種子板碑である。当時浄土教系信仰が盛んであったことがわかる。

⑲佐津間城跡 日
中佐津間1-9

大津川に臨む台地上に築かれている土塁と空堀をめぐらせて周囲を台地から遮断した単郭構造の城郭である。四方に突き出した橋台や橋矢構造など守備を主体とした構造で、城の入口にあたる虎口が村落側にあり、城と村落が一体であったことも考えられる。

築造された時期は戦国時代（16世紀中～後半頃）と推定される。

⑳光明寺宮道標
南佐津間10

24字の光明寺宮を円形に連ね、中央に大日真言を配している。また、鮮魚街道の道標を兼ねており、正面に「木おろし、成田山道」、右側に「松戸、江戸道」、左側に「栗野、ふなばし道」とある。文久4年（1864）の造立。

㉑白枝神社の森
佐津間字山王台1008

コナラを中心とした落葉広葉樹林が林全体を占め、下層にはヒカサキが多い。ノダフジが林内に広がり、5月には見事に咲き誇る。

㉒孝心講建設の道標
軽井沢R2081

軽井沢字清水の旧鮮魚街道に建てられた道標で、鎌ケ谷村・旧佐津間村・旧初富村などの地名が刻まれていることから、明治22年（1889）以降の建立と推測される。孝心（富士）講の人たちが道普請の時に建てたものと思われる。

㉓庚申道標
軽井沢2009

軽井沢字落山の給食センター入口の路傍に所在する。青面金剛を表す梵字𑖦（ウーン）と篆書で青面金剛が刻まれており、文化14年（1817）に造立された銘がある。

右側面には「東　志ろ井（白井）　軽井沢」、左側面には「南　かまがや　北　ふじがや」などとあり、鮮魚道（なまみち）の重要な道標でもあったことがうかがえる。

㉔渋谷総司騎位銅彫刻
南佐津間9-37（宝泉院境内）

総司は佐津間出身の討幕勤皇の志士である。赤報隊（新政府軍先鋒隊）に参加し、年貢半減を掲げて東山道を進軍し、活躍した。しかし「偽官軍」の汚名を着せられ、慶応4年（1868）、下諏訪で斬首された。昭和3年（1928）に復権し、この碑が建てられた。

㉕キンモクセイ《市指文》 日
栗野（個人宅内）

キンモクセイは市木として親しまれている。

この木は高さ8m、胸高直径約55cmの木で、キンモクセイとしては市内一の大木である。毎年10月初旬頃、オレンジ色の小さな花を多数つけて豊かな芳香を放つ。

㉖おしゃらく踊り《市指文》 日
軽井沢地区

軽井沢地区に伝えられる。鉦や太鼓、三味線の演奏による「高砂」「木更津」などの唄に合わせて、お酒落な動物を着て手踊りするもの。戦前までは小念仏踊りとも呼ばれた。関東地方の農民芸能の代表的なものの一つである。

㉗東林跡遺跡 ⌂ 初富803他（第五中学校内）

第五中学校建設時に調査された旧石器時代の遺跡である。当時は氷河期で、平均気温は今より5.6度低く、草原や針葉樹の林が広がっていたようである。まだ土器の使用はなく、道具の中心は石器であった。槍の先（ナイフ形石器）・皮剥ぎ（スクレイパー）など約120点の石器が発見されている。石器を含む遺物が集中して出土する地点が17ヶ所あった。この遺跡の生体となる遺物が発見されている地層の上には2万8千年～2万9千年前頃の鹿児島湾にあった火山を噴出源とする火山灰（姶良Tn火山灰=AT）が確認されているので、それ以前に形成された遺跡である。

出土した石器

㉘下総小金中野牧跡（野馬土手）《国史跡》 日
東初富1-2（初富小学校校庭西側）

野馬土手は、牧の施設のひとつで、野馬が村に入り、畑の作物を食い荒らすことを防ぐために村との境に設けられた野馬除土手と、野馬捕りを効率的に行うため、牧内に縦横に造られた勢子土手の2種類がある。

初富小学校の野馬土手は、勢子土手として造られたものである。江戸幕府の牧経営の様相を知る上で重要であり、かつ保存状態が良い野馬土手として貴重であるため、平成19年2月6日に捕込とともに、国史跡に指定された。

㉙首庚申《市指文》 日
鎌ケ谷1-6（八幡神社境内）

八幡神社境内に、天保12（1841）～13年にかけて建てられた、青面金剛像が10基あり、その側に文字塔が8基ずつ計90基ある。同じような石塔（仏像）を同じ場所に多く造立して数に応じて、多くの功徳を得るため、100基という多数が建てられたものである。江戸時代後半に下総で流行した信仰形態である。

㉚鎌ケ谷大仏《市指文》 日
鎌ケ谷1-5（大仏墓地内）

安永5年（1776）、鎌ケ谷宿の大国屋文右衛門が祖先の供養のため、江戸神田の鋳物師に鋳造させたものである。銅製の釈迦如来仏で、高さは台座を除き1.8mある。豪勢な開眼供養の様子が伝えられ、鎌ケ谷宿の盛時の様子を今に伝える貴重な文化遺産である。

㉛官軍兵士の墓《市指文》 日
鎌ケ谷1-5（大仏墓地内）

慶応4年（1868）、江戸幕府の滅亡に反発した旧幕府軍の一部と銃撃に向かった新政府軍とが、市川・船橋周辺で激しい戦いをした。その折、鎌ケ谷大新田付近で、新政府軍側の佐土原藩兵2名が戦死した。のちに明治19年（1886）、千葉県がこの墓石を建てた。

㉜清田家の墓地《市指文》 日
鎌ケ谷3-3

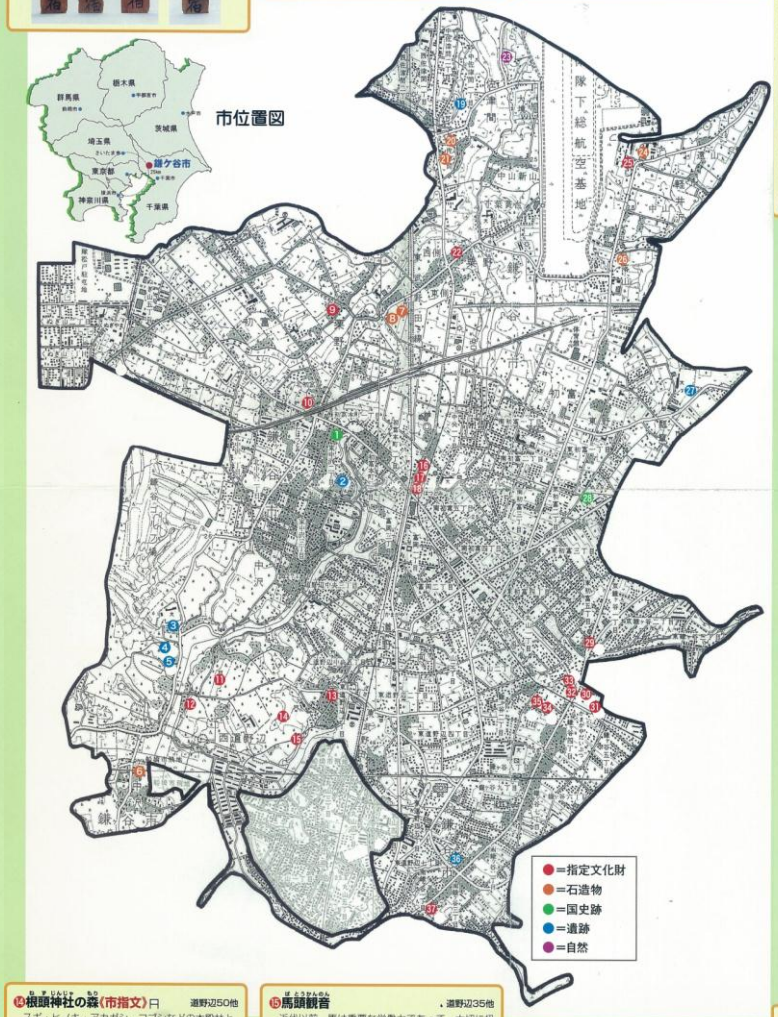
清田家は江戸幕府の命をうけ、小金中野・下野牧の牧士役を13代にわたって世襲した。牧士は野馬の管理を行ない、野馬捕りや将軍の鹿狩の際には、勢子人足たちを指揮した。また、苗字帯刀の他、乗馬や鉄砲の所持も許されていた。

㉝鉄道連隊建設の橋脚 日
東道野辺6-9

アカシヤ児童遊園内に所在する。津田沼に置かれた陸軍鉄道第2連隊は、昭和初年に訓練用として、津田沼・松戸間に鉄道を敷設した。これはその線路の橋脚である。路線は第二次世界大戦後、現在の新京成電鉄に払い下げられたが、訓練用に敷設された路線のため、大きく曲がりくねっていたので、手直しがされた際に路線とならず、橋脚だけが残されたものである。

㉞道標地蔵《市指文》 日
南鎌ヶ谷3-6-43（清長庵境内）

行徳・鎌ケ谷・木下を結ぶ「木下街道」は江戸時代の重要な交通路であった。この道標地蔵は、木下街道から神保（現船橋市）への分岐点に建てられたものと考えられるが、現在は清長庵内に所在する。正徳5年（1715）に造立された銘があり、市内最古の道標である。



＊⌂：説明看板あり　⌂：標柱あり

文化財の情報は市ホームページでも見ることができます。
「鎌ケ谷市の文化財」で検索または
http://www.city.kamagaya.chiba.jp/kakuka/kakuka-kyoikuiinkai/bunka/bunkazai.html